慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ビスマルクとカヴール（第二回）
Sub Title	
Author	林, 毅陸
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.3 (1909. 4) ,p.307(35)- 320(48)
JaLC DOI	10.14991/001.19090401-0035
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090401-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Sangoshiki, Injushingron, and the other treatises in which he developed his system. He died in 835, a venerable and venerated man. Buddhist Japan scarcely believes him to be dead even now. He is said to be sitting in his tomb in Mt. Koya, waiting for Maitreya to come and convert the world. Then he will go forth from his place of waiting and join in the glory of victory.

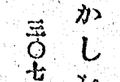
ビスマルクとカヴール（第二回）

林　毅陸

（二）

ビスマルクとカヴールは其政策の方向に於て互に主力を注ぐべき點を異にしたるは、既に前節に説きたる所なり。請ふ更に一歩を進め彼等の政策の主義即ち本質が如何に相異なりしかを見ん。

ビスマルクは鐵血宰相の名に依て知らるる。而して彼れの鐵血主義は既に少年時代よりして其徴候を示せり。彼はグッチンゲンに學生たりし時、決闘の雄として雷名を轟かし其回數二十八を下らずと云ふ。嘗て酒興に乘じてインキ壺を階上より窓下に投げ學校特設の法廷に訴へられたるに彼は平素愛養せる小牛の如き猛犬を伴ふて威嚇し、且インキ壺は自分にて飛び出したるならんとの詭辯を弄せり。又或傳説に據れば、彼は嘗て長靴を或靴屋に注文し、二十四時間に必ず之を造るべしと嚴談し、若し之に應ぜざるに於ては其猛犬をして噛み附かしむべしと威



ビスマルクとカヴール

嚇したりと云ふ。是れ豈一種の鐵血主義に非ずや。豪膽にして傍若無人なる此氣象は年長の後に於ても改まる事なく、彼が三十六歳にしてフランクフルト聯邦議會に赴任したる時にも左の如き逸話あり。彼が借受けたる室には呼鈴の備附無かりしを以て、之を家主に請求したるに、家主はビスマルク自身之を買求めて然るべしとて敢て應せず。ビスマルクは斯る挨拶を受けて平然默從するを好まず翌早朝其寢室に於て一發のピストルを放てり。家主は何事の起れるならんと大に驚愕し走り來つて尋ぬるや、ビスマルクは冷然して曰く、『驚くを已めよ、空砲のピストルを放ちたるは予なり。呼鈴なきを以て予は下女を呼ぶ爲に此方法を取りたるなり。予は今後常に之を爲さゞるを得ざるべきが故に、貴公宜しく此物音に耳を慣らすを可とすべし』と。所謂鐵血主義は既に茲に躍々たるに非ずや。

ビスマルクが普魯西の取るべき政策として鐵血主義を始めて告白したるは、一八五九年五月十二日首相シュライニッツに宛てたる手紙なるべし。彼は當時大使として露京に在り、伊太利獨立戰爭の形勢を望見して深く感ずる所ありたるが如く、上記日附の書中に於て『聯邦中に於ける現在の我等の地位は、早晩鐵と火とに依

て之を矯正せざるを得ざるべし』と言へり。後暫時巴里に在勤したる後、一八六二年九月を以て伯林に歸り首相となれる時、彼は議院に臨みて演說して曰く、『當今の大問題を解決するは辯論と多數の投票との能く爲す所に非ず。唯鐵と血と是れのみ』と。鐵血主義は愈正式に宣言せられしなり。而して此宣言以後、彼は其の特有の豪膽を以て無遠慮に此主義を實行し、先づ議會及輿論を無視して專斷的に軍備擴張を行ひ、憲法の曲解及民權の蹂躙の如き平然として之を敢てせり。彼は兵力を以て國運伸張の基礎と確信し、紛々たる口舌の如き敢て取るに足らずと爲せり。一八六三年十二月彼は其友ゴルツに送れる書中に於て、『貴君は獨逸の輿論、議院、新聞紙等が或不可思議の力を有し、吾人の統一政策を助くるを得べしと信ぜるも、予想ふに是れ一大誤見なり、空想の產物なり。吾人の力は新聞紙及議會的政策より生ずるを得ずして、唯だ一大武力の政策より來るのみ』と放言せり。

彼は自由民權及輿論等を無視するが如く、又『主義』なる者を無視せり。彼は上記ゴルツへの同一書中に於て曰く、『予は革命又は保守なる語に對して無頓着なる事凡ての文句に於けるが如し』と。革命主義と云ひ保守主義と云ひ彼は見て以て論ずる

38

るに足らざるの空文句と爲し、敢て之に拘泥する事を爲さず。彼は始め保守主義を標榜したりき。彼の眞骨頭は王權派なりき。然れども政略上有利ならんには、革命的民主的方策を採用するを辭せざるなり。彼は嚢々たる輿論を蹂躙して憚らざるが如く、紛々たる『主義』なる者の權威を認めざるなり。彼の言論及行爲に矛盾多きは之が爲にして、然も多くの矛盾の間に彼の特色は自ら一貫せる者あり。他なし如何なる者と雖も之を自己の政策に利用して憚らざる事是れなり。苟も獨逸統一の實行者なる以上、獨逸國民主義のみは彼の熱心に尊信したる所ならんと思はるゝも、此點に於ても多少惑ふべき者あり。彼は其の自白せるが如く、『獨逸人たるよりも多く普魯西人なり』。彼は普魯西の利益の爲に領地利を獨逸より逐ひ且獨逸を統一せり。獨逸統一とは普魯西が獨逸を征服したるなり。ビスマルクが鋭意此事業に從ひたるは、國民主義を愛するが爲と謂はんよりも寧ろ普魯西を愛するが爲と謂ふを適當とす。卽ち國民主義は普魯西膨脹政策の爲に利用せられたりと謂ふを適當とす。

ビスマルクは鐵血主義を以て對外政策の特色と爲したりと云ふよりは、敢て單に文字の

39

通りの鐵と血とに依て國際問題の解決を圖りたるをのみ意味するに非ず。暫く此極端手段を論外に置くも、彼の外交は譎猾に且深酷峻烈にして、一種の凄氣を帶びん人をして覺えず悚然たらしむるに足る者あり。彼は條約の神聖を認めず、又信義及人情を顧みる事を爲さず。敵を蠱惑し欺瞞し而して之を利用する限りは利用し、然る上に於て之を陷穽に擠し且石を投ずるは、彼の得意と爲す所にして、塲地利の如き又ナポレオン三世の如き、共に此秘術に弄せられしなり。彼が外交的辣腕の動く所には、常に鮮血の淋漓たる者あり。必ずしも兵戈の交へらるゝを待たざるなり。而して彼が此の如く內外の政策に於て鐵血主義を取り、信義正義及人道等を無價値の空文字と爲して蹂躙し去りたるは、要するにレーゾンデタの已むを得ざる者ありたるに因る。國家至高政略の必要に迫られたるに因る。吾人は敢て之を非難するを得ざるのみか、寧ろ其大手腕及大勇猛心を嘆賞せんのみ。さるにても近世レーゾンデタ宗の開山たるフリードリヒ大王の國に、再び此レーゾンデタの權化を出したるは亦奇なりと謂ふべし。

然らばカヴールは如何なりしぞ。吾人はカヴールの政策の主義がビスマルクの

鐵血主義に比し大に趣を異にせしことを一言せざる可らず。

カヴールは少年の頃兵學校に入り、其在學中皇室の侍童とせられしも窮屈を厭ひて罷められ、『危險なる奴』と稱せられし事あり。後二十歳未滿にしてジェノアに奉職する間に同地方に行はるゝ自由主義の感化を受け、次で巴里七月革命の影響として益々自由派に傾き、慫慂的に他の僻阪の地に移されたり。以て其の少年時代に於て既に尋常舊式の人物に非ざりしを知るに足るべし。然れども彼は敢て粗豪過激を以て特色と爲せしに非ず。彼は當時流行のカルボナリ又は青年伊太利黨に入りて過激なる運動に從事せんとはせざりしなり。斯て彼は爾後十數年を溫厚なる一私人として過ごし、四十歳に垂んとする頃愈政治の活舞臺に出づるや、彼は英國流の立憲政治を以て理想と爲し、サルデュニアをして『伊太利に於ける小英國』たらしめんと欲したり。卽ち先づ國會開設を主唱し、憲政實施後は其擁護に努め、依て以て塊に當るの勢力を養はんと期せり。一八四八年の失敗後、彼は曰く、『自由が伊太利半島の一隅に存せん限りは敢て絶望するを要せず。』ピエモンが專制主義及無政府主義の外に超然として其制度を維持せん限りは有效に祖國の改造

を圖るの道存すべきなり』と。彼は穩健なる英國流の自由政治に依て國運の一新を圖らんと欲し一面保守黨を排斥すると同時に又革命的急進派に反對し自ら稱して中正（ジュストミリュー）と言へり。而して之が爲に往々保守及急進の兩派より非難せられ孤立の地位に陷りたる事ありと雖も、彼は敢て其主義を枉げざりしなり。

一八六〇年ガリバルヂが南伊征服の餘勢を以て中伊なる羅馬法王領内に進み來らんとし、形勢極めて危急を告ぐるや、カヴールは之を制止するの目的を以て先づ自ら法王領を占領するに決心せしが、此時彼に向つて獨裁官的權力を握らんことを勸告する者多かりしも、彼は之を拒絶して左の如く言へり。

『予想ふに吾人は議院と提携せんには專制權に出來難き多くの事を爲すを得。司法の摘發を怖れず且極端派の狂暴に勇氣を失はざる如き公明正大に且剛健なる内閣は、議院内の對戰に於て唯利益を得るのみなる事は、予が十三年間の經驗に依つて悟り得たる所なり。予は兩院閉會中の場合の如くに心細く感じたる事なし。且予は予の起原を忘れ予の一生の主義とする所を否認するを得ず。予は自由の子なり。予をして今日あらしめたるは自由なるなり。若し自由の

面上に覆被を置くを要すとせば、之を爲すは予の事に非ず。若し伊太利人にして獨裁官の必要を承認せんには、彼等は予よりも寧ろガリバルヂを選ぶを可とすべし。議院の道は長しと雖も、是れ却て確實なり』。

是れカヴールの眞主義を道破したる者にして、其のビスマルクの鐵血主義と相距ること遠しと謂ふべし。要するに彼は立憲主義を以て其政策の骨子と爲し、穩健に且公明なる態度に依つて輿論の信用及同情を引かんことを期せり。而して此特色は內治上に於けると雖も、是れ却て確實なり』。

より兵力に重きを置きしも、對墺問題を解決するには鐵血以外に道德的勢力の後援を要することを思ひ、列強に對しては努めて溫和に且細心なる態度を守り、以て其信用を得んとしたり。穩健に且公明なる彼が內治策は實は其外交政策の一部とも見做すべく、彼は依つて以て列國の尊敬及同情を得んと欲せしなり。彼はクリミアに兵を送るの苦痛を忍び、巴里公會に於ては列國に哀訴し、又サルヂニア王女クロチルドをしてナポレオン親王と政治的結婚を爲さしむるの苦悶を冒し、且サヴォイ及ニース割讓の犧牲を敢てせり。若しビスマルクの外交に鮮血の淋漓

たる者ありとせば、カヴールの外交には熱淚の滂沱たる者あり。彼の外交には深く同情すべき者こそあれ人をして悚然として戰慄せしむる底の者は毫も之を認むるを得ざるなり。

（四）

然れどもビスマルクは鐵血主義なるの故を以て單に大膽粗豪及勇猛のみを以て特色としたりと思ふは大誤解なり。同時にカヴールが鐵血主義ならざるの故を以て之を溫和細心の外交家とのみ解するは又大に誤れり。兩雄の兩面を叩く時は、吾人は其相異なるが如くにして然も大に相似たる所あるを發見せざるを得ず。或人ビスマルクを評して曰く、『彼は獅子と狐の性質を兼ね有す』と。若しビスマルクを以て獅子にして狐の性質を兼ぬとせば、カヴールは狐にして獅子の性質を兼ぬるなり。要するに最も顯著なる部分の或は甲たり或は乙たるに過ぎず。ビスマルクは一見傍若無人にして豪膽何者をも怖れざること獅子の如くなりと雖も同時に狐に似たるの細心巧慧（フヒオス）を有するは、其事蹟に於て歷々之を認むるを得べし。彼がシュレスウイグ、ホルスタイン事件の初期に於て保守主義及正統主義の假面

を裝ふて埃地利を魅し去れる其手腕の如何に巧慧なりしかを看よ。彼がビアリッツ會見に於てナポレオン三世の野心を挑發し、且其後絶えずライン左岸の獨逸領又はルクセンブルグ又は白耳義等の好餌を順次に掲げ來つて佛帝を誘惑欺瞞したる其手腕の如何に野狐に類せしかを看よ。彼は敵を擊つには極めて勇猛果決にして宛も霹靂雲を劈いて來るの觀ありと雖も、此痛擊を擊ち下すの前に於ける彼の細心は實に驚くべき者あり。彼の鐵血主義は無策なる武辨の鐵血主義には非ず。微細なる注意と緻密なる術策とは其基礎となれるなり。敵と最後の大破裂を爲すに當り、如何に彼が詭辯以て世を欺くに巧なりしかを看よ。彼は倫敦條約を守り革命運動を妨ぐる者なりと自稱し、且『ホルスタインに聯邦の干渉を實行するは卽ち丁抹王の權利を承認する所以なり』と唱へ、以て二州割取の暴擧に着手せり。彼は『總ての王位に危害を及ぼす革命的傾向に庇護を與ふるは不都合なり』と稱しつつ墺と爭を開けり。彼はエムス電報を改造して普佛戰爭の破裂を促しながら、佛國當局者の過失に乘じて其態度を曲解し、『佛國政府は戰爭の逸し去らんとを恐れたるが如し』と譏誣せり。彼は單純なる鐵血漢に非ざるなり。彼は大

膽に敵を擊つことをのみ知るに非ざるなり。彼は甘言以て人を惑はし、妖態以て人を魅するに長じ、又詭辯曲說以て世を欺くに長ず。且彼は邁進する前に非常に細心なりしが如く、退くべきに退くに於ても又非常に細心なりし事を記せざる可らず。サドワ後普王幷に軍人派は維也納を衝いて城下の盟を結ばしめんことを主張し、縱令卽時の講和に同意するとするも種々の條件を提出して强硬に爭ひたるにも拘らず、佛國の干涉を氣遣へるビスマルクは死力を盡して之に反對し、遂に溫和なる條件にて速に局を結ばしめたり。佛蘭西と講和條件を議する場合には、彼は怖るべき干涉者を有せざりしを以て酷烈なる要求を爲せりと雖も、猶ヴェルサイユに於て新獨逸聯邦案を作る時、南獨逸諸國を羅致するが爲に溫和なる讓步を爲すに苦心し、勝誇れる普王其他の大不興大不滿を買ふを辭せざりき。一八七一年一月十八日ヴェルサイユ宮に於て新獨逸帝國の布告せられたる時、最も得意なるべきビスマルクは實は最も苦悶に沈みしなり。又普佛戰爭後に於ける彼の守成的外交は實に細心を極めたり。又三國同盟の傍に於て密に露國と妥協を結び、以て所謂二重保險を爲したるは實にビスマルクなり。誰か彼を以て單純なる鐵血

宰相と爲すや。

ビスマルクが獅子にして狐の性質を兼ねし其一方に於て、カヴールが狐にして獅子の性質を兼ねしも又大に注意すべき者たり。

カヴールは實に極めて細心慧巧にして、列強に向つては溫和抑遜を是れ努め、內治の政策又穩健中正を期し、萬事に於て微細の點に至るまで注意密なりしと雖も、彼が一たび斷じて行ふや、其大膽と大勇猛は實に驚くに足る者ありたり。彼が英佛と同盟して直接の利害關係なきクリミア戰爭に加はりたるは、何等突飛の大冒險なりしとするぞ。ガリバルヂに先んじて機を制せんが爲め、列強の非難を無視して兵を法王領內に侵入せしめたるは何等大膽不敵の處置なりしとするぞ。或は墺と開戰前に於て之を怒らしむる爲に過激なる手段を取るを辭せざりしが如き、或は國民的敵愾心を鼓舞する爲に革命的運動を激起挑發するを憚らざりしが如き、凡て彼が單純なる細心巧慧以て足れりと爲せしに非ざるを示すに足る。巴里公會閉會後彼は伊太利問題に就きクラレンドンと會話したる時、語りて曰く、『予思ふに政治に於ては語るには非常に細心にして行ふには非常に決然たるを要す。

時としては過度なる細心よりも大膽なる決心を以て危險少なしと爲すの場合存するなり』と。彼の語る所は卽ち彼の爲す所なり。後彼はサルヂニア議院に於て叫んで曰く、『我等は曩に取るべきの道を選擇し遂に果決及大膽の道を採用したり。我等は半途に留まるを得ず。是れ我等に取りては生存條件なり避く可らざる者なり。進むか若くば死するの一あるのみなり』と。其の大勇猛心を振つて悍然邁往直進せるの風貌は亦以て想見するに足らずや。マザード彼を評して曰く、『彼は過激に合するに節制を以てし、果決に合するに柔軟を以てし、近世的思想に合するに傳習的及保守的感情を以てしたり』と。又マンゾニの評に曰く、彼は一切の政治家的資質を具備し、『細心幷に不細心をすら』有したりと。誰か彼を以て單純なる穩健家細心家及巧慧家と爲すや。

カヴールとビスマルクは互に其特色を異にすと雖も、其相違は質の問題と云はんよりも寧ろ量の問題なり。要するに彼等は顯著なる方面を異にするに過ぎず。然も此事や各自國情の相違に基く所少なからず。カヴールをしてプロシアに在らしめば能くビスマルクたるを得しならん。ビスマルクをしてサルヂニアに在ら

しめば、遂にカヴールの爲せし所を爲すの外なかりしならん。（終）

利潤分配制度論

氣賀勘重

一、序論

所謂産業革命の氣運一世を風靡して生産の組織を一變し、勞働者と企業家の地位愈〻隔絶して兩者の嫉視軋轢漸く盛ならんとするに及び、學者經世家の起ちて之が調和の策を講じ、當局企業家及び實際家の立案し將た實驗したる手段方法は亦決して少なからざるなり。然かも經濟政策上の目的は概して一個だ少なしとせず。從て此等各方面の思想家及び實際家の立案し將た實驗したるの施策以て完全に之を達し得可きものに非ず、多くは幾多の施設を併せ行ふに依りて初て其幾分を達し得るの常なり。企業家對勞働者間の調和問題の如きも亦正に此範を出でず。之が解決の爲に策せられたる幾多の方案は何れも多少の短所あるを免れざると共に又多少の長所を具へ、何れも多少其解決に資するの實あり。是に於てか吾人は此等各種の方策の長所短所を精査して長所の利用し得可